

夏休み読書感想文・千頁読破記・夏休み体験文等 入賞結果発表

今年度の夏休み読書感想文・千頁読破記・夏休み体験文等の入賞者の表彰式を、高松キャンパスでは11月15日(水)に、詫間キャンパスでは11月14日(火)に実施しました。入賞者は以下のとおりです。



高松キャンパス表彰式



詫間キャンパス表彰式

【高松キャンパス】

読書感想文			
優秀賞	電気情報工学科4年	片山 大貴	
佳作	電気情報工学科2年	井清 光	
佳作	建設環境工学科2年	忍川 日菜	
千頁読破記			
優秀賞	機械電子工学科2年	池本 青空	
優秀賞	建設環境工学科3年	荻田 綾花	
佳作	機械工学科4年	柳川 泰我	
夏休み体験文			
優秀賞	機械電子工学科2年	岡田 朋也	
佳作	1年3組(MS)	谷本 大航	
佳作	機械工学科2年	岡田 響	
佳作	電気情報工学科3年	佐藤 光	

【詫間キャンパス】

読書感想文			
グランプリ	電子システム工学科5年	勝田 稚菜	
優秀賞	通信ネットワーク工学科2年	前山 胡桃	
優秀賞	1年1組(IT)	溝渕 悠朔	

エッセイ

最優秀賞	通信ネットワーク工学科4年	田中 那奈
優秀賞	電子システム工学科3年	秋田 陽介

小説

最優秀賞	該当なし	
優秀賞	情報工学科2年	平岡 将
佳作	1年2組(IT)	内田 歩輝
佳作	1年2組(IT)	渡邊リキト

短歌

最優秀賞	電子システム工学科3年	岡部帆乃夏
優秀賞	電子システム工学科4年	福田 勇太
優秀賞	1年2組(ES)	秋山 大翔

俳句

最優秀賞	通信ネットワーク工学科4年	監崎 悠平
優秀賞	電子システム工学科3年	塩冶 卓也
優秀賞	電子システム工学科3年	徳武 詩穂

写真

最優秀賞	1年3組(ES)	尾崎 玲音
優秀賞	電子情報通信工学専攻2年	瀧川 健太
優秀賞	電子システム工学科4年	西山 徹
優秀賞	情報工学科3年	三宅健太郎

講評

高松キャンパス
一般教育科 坂本 具償



今年の応募総数は、読書感想文が152篇、千頁読破記が164篇、夏休み体験文が227篇で、合計543篇でした。昨年度より約40篇ほど少なかったのは、4年生の応募が少なかったからでしょうか。では、この図書館だよりに掲載された入賞作品に対して少しばかりコメントしていきます。

読書感想文・優秀賞の片山君の「世界から〇〇が消えたなら」(川村元気著「世界から猫が消えたなら」)につ

いて。片山君がこの物語の主人公になったつもりで、原作の「猫」の代わりに、さまざまな〇〇を入れて独自にしっかり考察してくれているところがすばらしいと思います。生きることと同価値を持つ〇〇って何なのでしょう。「部活」が消えても「時計」が消えても困りますね。そして何よりも「僕」が消えたとき、きっと大きな喪失感をともなった深い悲しみの朝が訪れるに違いありません。

千頁読破記・優秀賞の荻田さんの読破記について。「大事なことは、この本を読みたい。この本はおもしろい。と思える本に出会うことだと思います。」と荻田さんは言っています。図書館企画としてこの千頁読破記を何十年前に始めた当初の目的は、まさにそこにあるのです。しかし、問題は、その本がおもしろいかどうかは読んでみなくてはわからないことです。そこにジレンマがあります。そこに千という数字の意味があるのです。そして千は、二千でも三千でもいい、いや五百でも百でもいい

のです。出会えれば、数字など意味がなくなるのですから。

夏休み体験文・優秀賞の岡田君の「長く短い一日」について。実は評者は、たまたま岡田君が出演する、そのNHKの生番組を見ていたので、その時の映像と岡田君の体験文とを重ねて読むことができました。抑制された文体でありながらその緊張感と充実感とがにじみ出てくる体験文でした。なお、選者の担当主事である澤田先生からは、凡そ以下に示すコメントをいただいています。

放送局からの突然の依頼を受け入れたことが、本人にとって思わぬ成果を引き出したものと思います。ものづくりの達成感と同時に、自身の弱点を克服する臨場感に引き込まれてしまいました。ピタゴラスイッチのスタートを切り、今後、困難をどのように克服していくことになるのでしょうか。ヒューマンスイッチを実践した盛夏をまぶしく感じ、優秀と判断しました。

詫間キャンパス

一般教育科 国語科

昨年度から、「読書感想文コンクール」は「図書館文芸コンクール」に生まれ変わった。第2回となる29年度も、前回同様、多くの個性豊かな作品が集まった。その中から最優秀・優秀を受賞したのは以下の諸君である。

読書感想文部門は、グランプリに5ESの勝田雅菜さん「『日本でいちばん温かい会社』を読んで」、優秀賞に2CNの前山胡桃さん「明日の保証」、1-1の溝淵悠翔君「『コンビニ人間』を読んで」が選ばれた。勝田さんは各部門最優秀賞の中から選ばれるグランプリを獲得した。前回グランプリが出ていなかったため、今回が初のグランプリ作品誕生となる。チョーク会社の障害者雇用の問題と自分自身の就職活動とを重ね合わせながら、丁寧に、素直に文章を綴り、読むものを納得させる読書感想文を完成させた。勝田さんは、過去に何度か優秀賞に選ばれているが、初の最優秀賞で堂々のグランプリ受賞である。優秀賞の2人はやや自分の感情に流されすぎていて、読書感想文の完成度としては最優秀に届かなかった。

小説部門は、優秀賞に2ITの平岡将君「夢なんて持つものではない」。佳作に1-2の内田歩輝さん「水彩重ねて、恋の色」、1-2の渡邊リキト君「アルヴィスの舟」が選ばれた。「夢なんて持つものではない」は病室での入院患者の物語。文章はよく書けており、ラストの盛り上がりも十分であるが、物語のシチュエーションやラストの仕掛けなど、どこかで見覚えがある感が否めなかった。読者をどきりとさせる斬新な切り口やひねりが欲しかった。「水彩重ねて、恋の色」は女子高生の恋を美しい文体で丁寧に綴った好編。ただ、片思いの男子と両思いだったという典型的なパターンであったため、物語として面白くはなかった。「アルヴィスの舟」はいつかの時代、妖精のいるどこかの国を設定したファンタジーである。よく書けてはいるが、舞台設定の必然性が弱く、妖

精の少女と主人公の関係など想定内に収まってしまった感がある。いずれもよく書けた力作ではあったが、短編小説としてはインパクトに欠けた。このため、残念ながら今回最優秀は選ばれなかった。

今回から加わったエッセイ部門では、4CN田中那奈さん「迷い」が最優秀賞、3ES秋田陽介君「時間と心」が優秀賞に選ばれた。新規のジャンルということもあり、応募数は7編と少なかったが、各々ががんばって書いてくれた。自由に書けるという不自由の中で、今後どのように工夫を凝らすことができるかが「エッセイ」の課題であろう。

短歌・俳句部門に関しては、今年度から「創作事情文」を追加した。作成にあたっての背景や工夫点を記すことで、より自分自身の作品を見つめなおすことを目的としている。これにより、一つ一つの作品を丁寧に仕上げるという意識が見受けられ、レベルの向上に繋がったと思われる。

短歌部門の最優秀賞、3ES間部帆乃夏さんの「ミンミン シャンシャン ツクツクハウシ ジッ ぼとり 晩夏の風に」は自由律短歌である。定型に縛られてはいないものの、何やら小気味よいリズムが感じられる。しかし、下の句の「ジッ ぼとり」というリズムの不安定さが、セミの死による時の流れ・虚しさ等を暗示させている。あらゆるストーリーが立ち上がる点は、評価の一番のポイントとなった。優秀賞秋山大翔君の「サーサーと 海辺で聞きし その音に 幼き頃を 懐かしみけり」は、一句目の「サーサーと」が大きなインパクトとなっている。波の音にしては一般的とは言い難い表現をあえて選択することで、独自の感覚を表現することに成功している。下の句に対応するような独自の表現があれば、深みのある作品に仕上がったであろう。優秀賞福田勇太君の「台風が 何かをさらい 通過した 笑顔か花か 思い出かな」は壮大なドラマ性が読み取れる。作者の思いは、読み手に多くの共感を得ることだろう。あえてストレートな言葉を選んでいるのもポイントになっているが、最終句の字足らずが、それまでのリズムを崩している。音の響きを意識すると、なお統一感が出ることだろう。

俳句部門の最優秀賞、4CN監崎悠平君の「幼な手で そっと包みし 姫蛭」は絶妙な言葉の選択で、鮮やかに情景を切り取りつつ、過去の憧憬を表現している。加えて、「そっと」という言葉は蛭の命の儚さを示しており、作者の伝えたい「蛭の大切さ」への感動が呼び起こされる。読み手に多様な思い起こせることができる、奥行きのある優れた作品であると言えるだろう。優秀賞3ES塩冶卓也君の「夕焼けや旅の終わりの瀬戸のはし」は、区切れを効果的に挿入し、情景を抒情的に切り取ることに成功している。さらにポイントは「はし」が端この「端」と、瀬戸大橋の「橋」の二重の意味を持つ、掛詞になっていることだ。「夕焼け」で終わりを暗示させることに成功しているの、二句目に別の言葉を入れるという選択も考えられよう。優秀賞3ES徳武詩穂さんの「片隅で おいていかれる 空蟬か」における「空蟬」は

夏の象徴であり、かつ私たちが「生きている今の世」を表す言葉である。表の意味では、過ぎ去る夏の情景を、裏の意味で現世における無常を、という二重の解釈ができる句と評価した。この持ち味である時間の流れを、より読み手に意識させるために、区切れをつくるという組み替え方もできそうである。

短歌部門は、「独自の表現」、そして俳句部門は「多層的構造」が評価に大きな影響を与えた。若者ならではの感受性が光り、多様な視点から世界を切り取ることに成功した結果と思われる。次の課題はリズム、である。韻文はやはり、リズムや音の響きが重要な要素である。今回の作品制作時には、実際に口に出して作品を詠んでみるとよいだろう。

入賞作品紹介

〈高松キャンパス 読書感想文〉

優秀賞

世界から〇〇が消えたなら

電気情報工学科4年 片山 大貴

「世界から猫が消えたなら。この世界はどう変化し、僕の人生はどう変わるだろうか。世界から僕が消えたなら。この世界は何も変わらずに、いつもと同じ朝を迎えるのだろうか。」

これは『世界から猫が消えたなら』の冒頭の二文です。僕はこの部分を読みながら、「世界から何がなくなったら生活していく上で困るかな。」と表面的な事しか考えていませんでした。しかし、物語を読み進めていくうちに様々な事を考えるようになりました。

この物語の主人公である「ボク」はある日医者に脳腫瘍で余命わずかであると宣告されます。そんなときボクの目の前にボクにそっくりな姿をした悪魔が現われます。悪魔はボクに向かって「あなたは明日死にます。」と伝えます。「ただ世界から何かを消せば命を一日だけ延ばすことができる。」とも伝えます。そして、ボクは一日おきに世界から電話、時計、映画を消していきます。そうやってボクにとって大切なモノを消しながら一日、また一日と生きながらえていきます。

僕はこの物語を読んで本当に恐ろしいなと思ったことがあります。それは、「〇〇が世界から消えたとき、その〇〇が世界から消えたことを知っている者はそれが失われたように感じるが、〇〇が消えたことを知らない人たちは、初めからその〇〇が存在していたことすら知らない。」という事です。例えば、共通の趣味を通じて学校も年齢も違う友人ができたとき。しかし、ある日友人との共通の趣味が世界から消えてしまったらその人との思い出などが全て初めからなかった、と言う事になってしまいます。自分はその趣味がなくなったことによる喪

失感を味わうことになります。しかし、友人にはそのような感情は一切ありません。このようなことはとても悲しいし、繰り返しになりますがとても恐ろしいことだと思います。ありきたりな言葉ですが、「大切なものは失って初めて気づく。」という言葉はこのようにことを示しているのではないかと、とも思いました。

また、僕は実際にこの物語の主人公になったつもりで自らの寿命のために一つひとつ〇〇が消失していく世界について考えてみました。自らの寿命のために多くのものが失われていく中で、「消えてしまう〇〇が存在しなくなった世界では、自分が生きている意味がない。」と感じるときがあるのではないかと考えました。また、その〇〇とは、自分が「死ぬこと」と同じだけ価値があるものだといえます。〇〇と「死ぬこと」が同価値であるということは、〇〇と「生きること」も同価値であるといえると思います。

つまり、「自分が生きる」ということは世界に存在する〇〇の存在があって初めて価値のある存在であるといえる、と僕は考えました。

ここで僕は、自分の命と常に釣り合っている〇〇とはいったい何のことなんだろう、と考えてみました。

しかし、物語の主人公であるボクの命と釣り合っていたものが「猫」であったように、案外自分の身近に存在するものが自らの命と釣り合っていたりして、本当に「〇〇を世界から消すくらいなら死んだほうがましだ。」と思えるものは、実際に自分が死ぬときにならないと分からないんじゃないかと思いました。

そこで僕は、世界からなくなったらイヤなものについて考えてみました。

「世界から部活が消えたなら」

もし、世界から「部活」という概念が消えたとします。僕は中学の頃にバスケットボール、高専に入学してからは水泳の部活に所属しています。どちらも練習は苦しく辛いことばかりですが、目標を達成したときの爽快感は何事にも勝っています。また、部活動を通して忍耐力を身に付けることができるメリットもあります。だからもし部活やクラブ活動がなくなると人々は集中力や忍耐力を欠き、立派な社会人がいなくなってしまうと僕は考えています。また、クラブや部活動を通しての思い出がなくなってしまうと考えると寂しい気持ちになります。以上の事から、「部活」というものは僕の考えている以上に重要なものであると思いました。

「世界から時計が消えたなら」

世界から時計が消えたなら、登校時に利用する電車やバスのダイヤはどうなるのだろうか、人との待ち合わせはどうするのだろうか等々の様々な疑問が浮かび上がってきました。このように人間が創り出した便利なものは意外と人間を縛っているのかもしれない、と考えるようになりました。また、何か無駄なことをしてみるのもよいのではないかと考えるようにもなりました。

最後に冒頭部分に記した「この世界から僕が消えたなら、世界は何も変わらず、いつもと同じ朝を迎えるのだろうか。」という部分で、もし僕が世界からいなくなって

しまったら、少しでも誰かが悲しんでくれるような、少しでもいつもとは違う朝が来るような立派な大人になりたいと思います。

『世界から猫が消えたなら』 川村元気 著 マガジンハウス

〈高松キャンパス 千頁読破記〉

優秀賞

千頁読破記

建設環境工学科3年 萩田 綾花

私が今回の夏季休業中の間に読んだのは、「住野よる」さんが執筆された書籍4冊です。

なぜ私が住野よるさんの作品を読もうと思ったかというと、今年の夏映画化され、コミカライズもされた〈君の隣をたべたい〉が彼の作品だと知ったからです。そして、小説を手にとったのがきっかけとなりました。話題となった映画の原作はどのようなものなのだろうとワクワクしながらページをめくっていくうちに、寝る前に30分だけだと思っていたはずが、ページはみるみるうちに進んでいき、その夜のうちに読み終わっていました。私の目からは、涙が零れ落ちていました。さらに調べてみると、住野よるさんは他にも本を出しているを知り、すぐに購入しました。それが今回千頁読破をした書籍です。

夏季休業にはいった当初は、「国語の宿題に読書感想文がある。面倒くさいなあ、千ページなんて読めるはずがない。」と、思っていました。しかし、住野よるさんの『君すい』を読み、さらに他の3冊を読んだ時、いつのまにかページ数は千ページを超えていました。千頁読破記を書くというのは本当に本が好きの人が書くか、頑張っただけ千ページ読み終わった人が「読んででも読んででも千ページが来ない。苦痛だった。」というような作文を書くんだろうなと思っていましたが、気が付いたら読み終わっていた私はおそらく前者にあたるのでしょうか。読書感想文に苦手意識を持っていた私は、どんどん筆が進む今回の作文作業がとても楽しく感じられます。

住野よるさんの作品を4冊読んで思った彼の特徴は、登場人物の呼び方です。作品それぞれで独特な表現がされていました。最初に読んだ『君すい』では、「秘密を知っているクラスメイト」、「地味なクラスメイト」、「仲のいいクラスメイト」と、主人公に対する呼び方が変化していきます。2冊目の『また、同じ夢を見ていた』では、「アバズレさん」というインパクトのある人が出てきます。3冊目の「よるのばけもの」、4冊目の『か「く」「し」「ご」「と」「』では、学校が舞台となっているため、様々なあだ名が登場します。読んでいて独特な言い回しを感じるとなんだかうれしくなりました。

今回千ページ読んでみて感じたことは、無理に千ページ読もう、読書しようと試みても苦痛しか残らないし、読んだ本の内容もたいして頭には残らない。それであれ

ば、原稿用紙を白紙で出してしまうばよと思います。大事なことは、「この本を読みたい。この本はおもしろい。」と思える本に出会うことだと思います。そのために、本と触れあう時間を増やしたいと思いました。本屋や図書館にも足を運びたいと思います。

住野よる

『君の隣をたべたい』	281頁 双葉社
『また、同じ夢を見ていた』	257頁 双葉社
『よるのばけもの』	246頁 双葉社
『か「く」「し」「ご」「と」「』	257頁 新潮社

〈高松キャンパス 夏休み体験文〉

優秀賞

長く短い一日

機械電子工学科2年 岡田 朋也

今年も夏がやってきた。今年もピタゴラを作るときが来た。そして、今年も…。

8月6日、NHK高松からの連絡を受けた。内容は、9月1日の生中継で僕のピタゴラを紹介したいというものだった。それを引き受けた僕は、さっそくピタゴラの製作にとりかかった。お盆を挟み、製作期間20日の新作はついに出来た。

そして9月1日当時。今日は朝から忙しい。新作を完成させるために徹夜してきた僕にとって早起きほど苦なものはない。身支度を終え、新作のある自分の部屋に向かう。とりあえず、TVに映るこの部屋だけはきれいにしておかないといけないと思い、掃除を始める。そして、掃除が終わったのが午前10時。自由な時間は今しか無いと思い、僕は携帯をいじり出した。しかし、どうも落ち着かない。

その時、昨年の24時間TVの依頼を受けたとき、友達に出演することを話さなかったことを思い出した。なぜあの時友達に自分を見てもらおうのを拒んだのだろうか。思い出せなかった。よし、今年は皆に報告しよう。そう思い、ツイッターに投稿した。

昼になり、スタッフの方々とアナウンサーの松下さんの合計8名がやってきた。まずは部屋の間取りをチェックし、カメラや照明の位置を確認した。次に、生中継のためのケーブルや何やらを中継車と継ぐ作業を行った。スタッフの方々が忙しく動いている姿を見て、だんだん緊張し始めてきた。成功するのだろうか、言葉をゆっくりと話せるほど落ち着いていられるのだろうかなどと考えている間にも作業は着々と進み、一応の準備が完了した。この時既に3時。本番まであと3時間半。

ここで、スタッフ達に一度ピタゴラを見せることになった。もちろん準備はできているが、成功するかどうかは誰にも分からない。ピタゴラは実に繊細で、温度や気温によっても変化する。これは多くの材料が木でできているためであって、わずかなゆがみが損害を招くのだ。ま

た、このピタゴラは最初に作り始めた時から3週間が経過している。そのため初めに作った部分では強度が弱くなっており、製作当初の正確な動きは、キレの無い柔らかな動きへと変化している。これらの悪条件を全て乗り越えたとき、初めてピタゴラは成功するのである。

動かしてみると、2ヶ所しか詰まらなかった。これらは僕の手によって改良が施され、より失敗しにくいものとなった。このように幾度となく改良をし、より良いものを作っていくのがスタンダードな方法である。もちろん装置そのものを別の機構に取り換えるのではなく、今あるものにガードレールをつけたりだとか重りの調整などをするのである。しかし、これによって見栄えが悪くなることもあり、一概に良いものであるとは言えない。思いの他ピタゴラを見せてからというもの、リハーサルまでの時間があった。この間スタッフの方やアナウンサーの方と話をした。趣味の話であったりゲームの話であったりとたわいもない話をした。

4時になり、1回目のリハーサルが行われた。1回目は通しの時間計測とカメラワーク、中継車の設定を行う。このときの僕のセリフは、NHKが用意した原稿を基にアナウンサーが僕に質問し、それにアドリブで答えるものだ。一回目リハの結果、時間が大幅にオーバーしていることが分かった。そこで内容を凝縮。カットし、2回目のリハーサルに。その後も数回リハを行い、次はスタジオとも連携して行うこととなった。この数回のリハーサルを通してセリフも内容を固めていき、ようやく流れをつかんできた。

5時半頃になりスタジオと中継場所を中継車によって継いだリハが行われた。これにより、スタジオでのコメント、カメラの切換時の設定、その他時間調整や音量調整などが行われ、いよいよ本番を待つのみとなった。この時、今年の24時間テレビに出演することをなぜ友達に話さなかったかを思い出した。理由は単純。恥ずかしいからだ。僕は昔から人見知りで、友達に自分の姿を見られるのが嫌で、自分で自分自身を見るのも嫌だった。大分TV慣れしてきたとはいえ、やはり嫌なものは嫌だ。だがもう既に自分が今回出演することは友達に知られているし、自らツイッターに投稿したし、手のほどこしようがない。そうだ、もう腹をくくってじっと耐えるしかない。そう思った。

6時をまわり、本番の時間が刻々とせまってくる。逃げ場はない。穴もない。成り行きに運をまかせるしかないんだ。緊張が増してくる中自我を保ちつつ、本番に臨んだ。



〈詫間キャンパス 読書感想文〉

最優秀

「日本でいちばん温かい会社」を読んで

電子システム工学科5年 勝田 稚菜

「幸福な職場」と聞いて、皆さんはどんな職場を想像しますか。私は舞台演劇が好きで、よく舞台俳優の方や製作会社のSNSを見ているのですが、偶然見かけた「幸福な職場」という舞台のタイトルの強さで惹かれました。しかも、実話を元にした作品らしい。私は初めてこのタイトルを目にしたとき、「そんな会社が本当に存在するのか？」と疑問に思いました。私とその作品を知ったときはちょうど就職する企業に悩んでいた頃でした。それからしばらく経って、無事に就職も決まり、毎日あった部活からも引退したとき、ふとその作品のことを思い出しました。「気になっていたし、関連書籍があれば読んでみようかな」「来年には就職するし、何か少しでも得るものがあれば良いかな」なんて軽い気持ちで、「日本でいちばん温かい会社」という本を手に取りました。

この本は、国内のチョコレート3割を占める「日本理化学工業」の会長・大山泰弘氏によって書かれています。この会社の特徴として社員の7割以上が知的障がい者であることがあります。大山会長が知的障がい者の社員に教えられたこと、いかにして社員と共に逆境を乗り越えてきたかが詳しく書かれていて、まるでフィクションの様でした。でも、「事実は小説よりも奇なり」という言葉があるように、ページをめくる度に変わっていく会社全体の雰囲気に私はどんどん引き込まれていきました。

日本理化学工業が知的障がい者を雇用するきっかけとなったのは、養護学校の十五歳の女子生徒二人が職業実習に訪れたことです。私は養護学校の先生が大山会長に女子生徒の就職のお願いに何度も訪れていた時の言葉が印象に残っています。

「せめて働く経験だけでもさせてあげたいんです。このままだと生徒たちは働くということを知らずに地方の施設で一生を終えてしまいます。この最後のお願いを聞いていただけませんか」

大山会長は先生のこの言葉で女子生徒を受け入れ、女子生徒の一生懸命さを目にして、採用を決めたのです。一般的に会社は新卒一人を採用するときにおよそ1~2億円の買い物をしているといわれています。だから、大山会長のこの決断がどれだけ大きなものだったか想像もつきません。私は、「働く」ことは大人になれば必ずできるものだと思っていました。でもそれは、雇ってくれる人がいて、自分が必要とされる仕事があれば成り立たないことに気付いていなかったのです。働くことができる環境があることに感謝すべきだと改めて感じました。

社員の7割以上が知的障がい者である日本理化学工業を知った時、私は「そこで働く健常者社員には何か条件があるのか」と疑問を抱きました。実際は特別な採用基

準はなく、特別な社員教育も行っていないそうです。ただ、大山会長は「彼らの理解力にあわせて、できるようにするのが君の仕事なんだ」と健常者社員の方々に語りかけるそうです。私はこの言葉は「とても難しい当たり前」だと感じました。相手の理解力に合わせて説明しないと理解してもらえない。でも、理解力は人それぞれ違うから、各々の理解できる基準を見つけなくてはならない。当たり前のことなのにとても難しい。私自身、同じ教え方をして貰って、周りの人はできて私はできなかったことが何度かありました。それは、その人の教え方が間違っていた訳ではなく、単に私に合っていなかっただけです。日本理化学工業ではストップウォッチの代わりに砂時計を使用したり、計りの代わりに天秤と色付きの重りを使用したりと工夫を凝らしています。私は、各々の理解力に合わせて教えられる人は、アイデアを多く思いつくだけでなく、相手をよく知ろうとし、思いやりがある人で、そんな人が多くいる会社がきっと温かい会社なのではないかと思いました。

現在、ホワイトボードの出現によりチョークの需要は下り坂にあるそうです。実際、私の学校でも数年前に教室の黒板はほとんどホワイトボードに変わりました。この状況を打破するために、日本理化学工業は「粉がまったく出ない、ホワイトボードでも使えるチョーク」を早稲田大学との連携により開発しました。そして、2005年に「キットパス」が発売されました。チョークの良さ、ホワイトボードの良さ、それぞれを互いに生かし合うことができる製品作りの姿勢はまるで会社の様子そのものを表していると私は思いました。この商品は、窓ガラス等にも描けて、濡れた布で消すことができます。なので、家の中で外の景色を見ながら大きな窓に絵を描くことができるのです。子どもたちのお絵かきから工事現場まで、幅広い世代・様々な現場で利用されているところがまるで日本理化学工業の温かさがどんどん広がっているように感じました。

本を読んでいると何度か出てくる言葉があります。「人間の究極の幸せは、人に愛されること、人にほめられること、人の役にたつこと、人から必要とされること」この言葉は大山会長がある寺の住職に知的障がい者雇用について相談した際に言われたそうです。私は、初めてこの言葉を目にしたとき、なんだかすんと心に落ちて納得したのを覚えています。そして、大山会長は「働くことによって愛以外の3つの幸せは得られる。私は働くことでその愛までも得られると思う」と書かれています。来年から社会人として働いていく私にとって、この言葉は「働く」ということに対してのポジティブなイメージを与えてくれました。

この本を読み終えたとき、私は就職活動をしていたにも関わらず、知的障がい者の雇用についての無知さを痛感しました。また、様々な人たちが互いに交わし合う素敵な言葉が心に響きました。これから自分がどんな社会人になっていくのかまったく想像が付きませんが、誰かに「究極の幸せ」のどれかひとつでも与えることができる人間になりたいと強く思いました。

最後に、真っ白な表紙に表題と著者名と共に書かれているこの言葉をおそらくちゃんと働いているであろう未来の私自身と、今働いている多くのの人たちに問いかけた。

「働く幸せを感じて生きていますか？」

『日本でいちばん温かい会社』 大山泰弘 著 WAVE出版

優秀

明日の保証

通信ネットワーク工学科2年 前山 胡桃

一番に目に飛び込んできた言葉だった。「君の臍臓をたべたい」。特に目的もなく立ち寄った本屋さんでのこと。気づけば手に取り、私に目的を持たせてくれていた。聞いたことがある言葉だったからだとして、そうでないにしてもこの結果は変わらなかっただろうと思う。

学校帰り、山内桜良はクラスメイトに話しかける。その会話の途中で彼女のこんなセリフがある。「【秘密を知ってるクラスメイトくん】に残り少ない私の人生の手助けをさせてあげてもいいよ」。家族しか知らない臍臓の病気である秘密を偶然拾った彼女の日記を見て知った。日記を見ていなければ、恐らく二人は関係をもつことはなかったと思う。秘密を知っているからこそ彼は特別な存在へと変わり、彼女は彼と一緒にいることを選択したように思う。その秘密を知ってもなお日常を与えてくれる彼と。

殺人事件、交通事故。毎日たくさんの命が失われている。そのニュースを見て思うことは「あー、またこのニュースか。」とあきれくらい。今まで死にかかわる経験がない私は関係のないことだから大丈夫だと思ってしまっていた。大病を抱えた人をテレビで見かけて思ったことがある。残り時間が限られているなんて言われたら何も考えられない気がする。想像すると怖くなる、と。でも私はまだ病気じゃないからとすぐに安心した。むしろそうなるまでは生きていられることが当たり前で、明日がくることは必ず保証されているとまで思っていた。この本と出会うまでは。

彼女も病気がわかったはじめの頃は私と同じだった。病気が怖かった。しかし、普通の日常を共にできる彼と出会って彼女は変わった。それを乗り越えることができた。何に関しても言えることだと思う。自分に起こっていることを受け止め、これまで通り、前向きに生きていくこと、ただそれだけだと思う。また、毎日の生活で一日いちにちをもっと大切にできるようになった。家族との時間を大切にするとか、ダラダラする時間を減らして自分のやりたいことをするとか。読む前とは時間の使い方がまるで変わった。もちろん、明日死ぬつもりで急いでいるというわけではないけれど。無意識にそうしようと思えるようになった。

誰しもが明日死ぬかもしれない、どのような条件をもって生きているかに関係なく、一日の価値はみんな同じだ